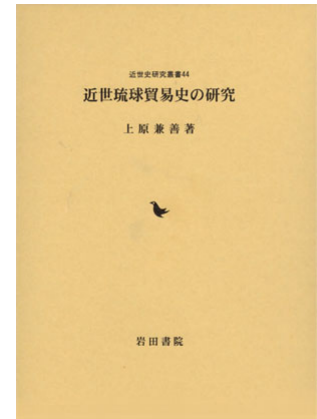


受賞作品

近世琉球貿易史の研究

上原兼善著

岩田書院 552 ページ、12800 円（税別）



書評

王府と幕府 通商経済観の対照

一橋大学名誉教授 斎藤修

鎖国下日本にも4つの貿易窓口があったといわれる。長崎・対馬・松前・薩摩である。本書は薩摩口という琉球を介した貿易チャンネルに関する、実証的には微細な点をゆるがせにしない、広がりのある歴史像を提示した力作である。

分析と叙述の対象は琉球王国を内国植民地化しようとした薩摩藩と、中国と冊封関係を結ぶことによって国家の歳入を対中貿易に依存してきた琉球王府との間の通商交渉が主で、枠組みそのものが大きく揺らいだ幕末にも多くのページ数があてられ、全体として、交渉にあたっての王府の粘り強さを際立たせている。

しかしそれ以上に興味深いのは、数々の事実発見を通して明らかになった王府と藩府の通商経済観における対照である。

琉球の対中貿易では国家が国家に進貢するという建前が貫かれたが、王府は貿易船乗員に現地での「勝手」取引を容認するというのが伝統的スタンスであった。これに対して藩府は、貢納・惣買入制・専売制をテコに、また対中貿易への割り込みを画策して、ことあるごとに琉球経済への介入を強めようとした。

王府は市場の原理で動くことを事実上容認していたのに対して、藩府ははるかに統制的であったということが出来る。

長年の研究を経て著者は、本書によって、薩摩という一藩府の通商政策上の特殊性を、異なった通商レジーム下にあった琉球王府との対比において描き出すことに成功したのである。